

山と博物館

第27巻 第10号 1982年10月25日 大町山岳博物館



十五夜の月

撮影 宮野典夫

月と星と私

夕空暗れて秋風吹き、白ずんだ夏空も秋が深まるにつれ次第に青く澄んでくる。日没も早くなり帰宅する道すがら誰しも夕空を仰ぎ、月影に見とれて、天界に思いをはせる季節である。春のおぼろ月夜もよいが、安曇野の尾花と共に仰ぐ月は最高であり、天界からの最美の贈り物である。澄んだ空にこうこうと輝く月を眺めていると、詩情が湧き、文字を通して、昔の人の宇宙観にも触れてもみたくなる。一方、宇宙時代に入った現在、幾つかの惑星や多くの衛星にクレータの存在が確認されていることから、月とそのクレータを通して、太陽系の誕生に思いをはせるのも、現代的なロマンではなからうか。また、月の無い夜の星空のさへはものすごく、夏空を飾ったコト座・ワシ座・白鳥座などが力無く西空に傾き、東からはベガス座やアンドロメダ座が静かに立ち上ってくる。私も、もう四十年近く夜空を眺めてきたが、秋の夜空の楽しみ方は、何といても、双眼鏡を首にして外に出ることである。特別な目的で星を観測するならば、口径の大きな望遠鏡が必要になってくるが、星空を楽しむには倍率の低い双眼鏡がよく、高くても八倍まで、これ以上になると星が動いてしまつて目がひどく疲れる。肉眼で見えてさえ心を引き込まれる秋空が、何倍にも拡大されて迫ってくる。誰しも肉眼で見える銀河系内の、しかも、太陽系に近い星ばかり見て井戸の中のカワズにはかりなつていくはなはず、せめて井戸の中から別の世界をかい間見たいがそれには絶好の季節である。我々の宇宙のすぐ隣の宇宙であるアンドロメダの宇宙が、東の空に見えるからである。アンドロメダ座のβ星からμ星、ν星と目をうつし、ν星の少し先にポーとした光斑が肉眼でも見える。約二〇〇万年か、つて到着した光である。双眼鏡では、はつきりとその姿をみせてくれるので、せめて別の宇宙でも眺め、自分の宇宙観を実感として捕えたいものである。(森義直・大町高校)

槍ヶ岳開山—播隆上人—

穂 苺 貞 雄

播隆は今から百五十六年前に、槍ヶ岳を開山し、日本登山史上画期的大業をなした念仏行者である。

播隆は天明二年(一七八二)、現在の高山県上新川郡大山町河内に、順信の二男一女の次男として生れた。生家は古くから川内道場といつて、一向宗の道場であった。道場とは山間の小さな部落では寺院を維持できないので、信仰の篤い家を中心となり、佛事などを催したりする簡易寺院といったものである。しかし播隆出生当時、この道場は廃止されていたので、その再興を念願していた。播隆はそうした信心深い家庭に育ち、十九才頃出家したといわれる。

はじめ、一向宗に入るつもりで、いろいろ努力したが、同宗は血脈相伝でない入門できないので、心ならずも蓮宗に入門した。これもこと志と違ったので、さらに浄土宗に入った。まず大阪・宝泉寺の見仏上人、ついで京都伏見の一念寺の蛸菅上人の弟子となり修行した。しかし当時の寺院の内容は、外から見た姿と異り、そこにも俗界同様、権門富貴を求める風潮があり、純粹に道を求めようとする播隆には合わなかった。そこで師の許しを得て、深山深谷へ踏み入り、念仏修行の身となった。

徳川幕府はキリシタン弾圧のため、寺院を格別に保護した。ために僧侶は修行を怠り安逸を求めようになつていた。そうした幕末の宗教界に対する反抗ないしは警鐘として、捨世派といわれる僧侶、播隆の如き念仏行者が何人か出現したのである。

播隆は濃州一宮南宮山の奥ノ院、あるいは伊吹山など俗界を離れた高山に籠り修行した

が、それは厳格を極めた。文政四年(一八二一)には飛騨高原郷(現上宝村)の杓子の岩窟で九十日間籠り修行した。また翌年もそこに入り越年して現存する。笠ヶ岳登山の根據地となった本覚寺に現存する、播隆筆の「迦多賀嶽再興記」には「人倫ノ応対ノ言語ヲ止メ、念仏ニ非ズンバ、唇舌ヲ不動ト誓ヒ、塩穀ヲ断テ無言ノ別時相違ナク相勸メ免ヌ」と、その修行の厳しさを伝えている。

播隆は先ず文政六年(一八二三)六月、笠ヶ岳へ偵察登山をしている。笠ヶ岳は有名な円空が元禄年間に開山したといわれるが、その後登山路が絶えていた。播隆は地元民の協力を得て、その登山道を完成し、翌文政七年八月には、一行六十六人の多勢で笠ヶ岳に登り、途中登山道の道標となる石仏を安置し、また頂上に信者から寄進された阿彌陀佛を祠り笠ヶ岳を再興したのである。この間、偵察登山を含め四回も笠ヶ岳に登っている。笠ヶ岳からは高原川の谷をへだて、槍穂高連峯の荒々しい岩峯がよく眺められる。特に天空高く聳立する槍ヶ岳の尖峯には魅せられた如く目をすえ、近い将来の開山を胸中深く秘めて下山した。

播隆は槍ヶ岳開山を決意し、はじめ飛騨側から登ろうとしたが、地元には案内人がいなかった。そこで文政三年より工事が進められていた信飛交易の最短の道、飛騨新道の入口、小倉村からの登路を選んだ。新道については、笠ヶ岳登山の基地本覚寺の椿宗和尚より、その事情を聞き知っていたからである。笠ヶ岳再興後、播隆は美濃、尾張の各地を巡錫し、文政九年(一八二六)八月、松本大村の玄向寺の立禅和尚を訪ねた。それは山案内を求め

るためであった。立禅は安曇郡野沢村の庄屋務台与一右衛門景邦を介して、小倉村の中田九左衛門を紹介した。しかし九左衛門は老令のため娘婿の中田又重郎を推薦した。中田家は代々鷹庄屋をつとめ、この附近の山にはくわしかった。鷹庄屋とは鷹の巣を発見してその難を捕え、公儀の鷹狩用に献ずる役目である。播隆は又重郎を従え、飛騨新道を冷沢ノ鍋冠山—大滝山へ登り、そこで新道とわかれ、蝶ヶ岳に向いワサビ沢を下つて梓川に出て、一俣・二俣と登つていった。当時、上高地一帯は松本藩の森林伐採の仕事の山で、下流より上流の二の俣までに、十四箇所の袖小屋があった。したがって二の俣までは楽に行けたが、それから先は人跡未踏の地を進むので、その登山は困難を極めた。雪だけの冷たい梓川を渡渉し、岩をめぐり、森林を切り開いて、赤沢の岩屋に着いた。ここに休み更に前進、大曲りから雪渓をわたり這松をふみ越え坊主の岩窟に辿りついたのである。この第一回目の登山は、又重郎とたて二人だけのよう云われているが、実際にはこの附近の山にくわしい獵師も同行したと思われる。一行はこの岩窟に泊り、晴れた日には、槍の肩まで登り槍の岩壁の登路を偵察したが、その登頂は他日を期して、この時は下山したのである。播隆はこの清浄無垢な槍の峯に、阿弥陀如来像を安置することを決意し、下山後そのための浄財を集めるため、各地を巡錫した。

それから二年後の文政十一年(一八二八)、浄財で鑄造した佛像をたずさえて、再び小倉村を訪れた。又重郎はじめ村人は、播隆との再会を心から喜び迎えた。播隆は又重郎をともない第二回目槍ヶ岳登山に出発したが、こ

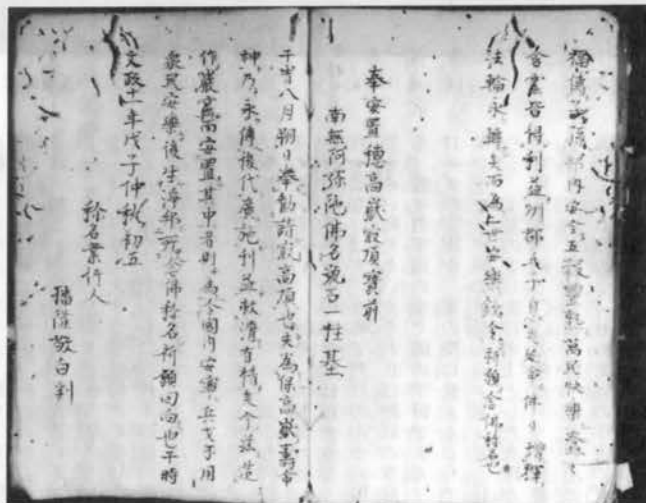
のためであった。立禅は安曇郡野沢村の庄屋務台与一右衛門景邦を介して、小倉村の中田九左衛門を紹介した。しかし九左衛門は老令のため娘婿の中田又重郎を推薦した。中田家は代々鷹庄屋をつとめ、この附近の山にはくわしかった。鷹庄屋とは鷹の巣を発見してその難を捕え、公儀の鷹狩用に献ずる役目である。播隆は又重郎を従え、飛騨新道を冷沢ノ鍋冠山—大滝山へ登り、そこで新道とわかれ、蝶ヶ岳に向いワサビ沢を下つて梓川に出て、一俣・二俣と登つていった。当時、上高地一帯は松本藩の森林伐採の仕事の山で、下流より上流の二の俣までに、十四箇所の袖小屋があった。したがって二の俣までは楽に行けたが、それから先は人跡未踏の地を進むので、その登山は困難を極めた。雪だけの冷たい梓川を渡渉し、岩をめぐり、森林を切り開いて、赤沢の岩屋に着いた。ここに休み更に前進、大曲りから雪渓をわたり這松をふみ越え坊主の岩窟に辿りついたのである。この第一回目の登山は、又重郎とたて二人だけのよう云われているが、実際にはこの附近の山にくわしい獵師も同行したと思われる。一行はこの岩窟に泊り、晴れた日には、槍の肩まで登り槍の岩壁の登路を偵察したが、その登頂は他日を期して、この時は下山したのである。播隆はこの清浄無垢な槍の峯に、阿弥陀如来像を安置することを決意し、下山後そのための浄財を集めるため、各地を巡錫した。

のたびは山の様子もすっかり判っているので容易に坊主の岩窟に着くことができた。翌日は天気晴朗、いよ／＼宿願を果すため、槍の尖峯にいとんだ。岩壁に手がかりを求め、言語に絶する危険をおかし、ついに槍ヶ岳初登頂に成功したのである。時に文政十一年七月二十日であった。

播隆と又重郎の喜びと感激は、想像に絶するものであった。頂上に岩を集めて、ささやかな祠を造り、その中に三体の佛像を安置した。播隆開山の一心寺蔵の「念仏法語取難録」(播隆の弟子達が播隆の一代の言行録を綴つたもの)には次の如く記せられている。

「槍ヶ嶽巔寶前に安置し奉る。
銅像阿弥陀仏 一俣
銅像觀世音菩薩 一俣
木像文殊師利菩薩 一俣

時に七月二十日、穂先三角の最峰頂に勧請し



「念仏法語取難録」

奉つるなり。夫れ当嶽の寿命神と為し、巖窟を造りて、その中に安置せり。後略」
とある。また次に、播隆が穂高へも登ったことが記せられてゐる。

「南無阿弥陀仏名号石一柱基
時に八月朔日、最高頂ニ勸請シ奉ル也。夫穂高嶽ノ寿命神ト為シテ、乃チ永ク後代ニ伝ヘ広ク利益ヲ施シ、有情を救済セン、今茲ニ巖窟ヲ造作シテ、其ノ中ニ安置スルハ、則チ国内安寧ニ、兵才不用、衆民安楽ニシテ、後淨邦ニ生レ令メン為ナリ、念仏稱名シ、祈願回向スル所ナリ、時ニ文政十一年戊子仲秋の初五
稱名業行人 播隆敬白判」

これによると、播隆は槍ヶ岳初登頂の直後の八月一日に、穂高へも初登頂したことを立証している。しかしながら、名号石を安置した事はまだわかっていない。この当時、穂高とは、穂高神社の奥社の山として、前穂明神を漠然と云っていたので、恐らく明神池の畔から、その一角に登つたものであろう。播隆はその後、各地を巡錫中でも、槍ヶ岳のことは常に心にとどめていた。

天保四年(一八三三)八月、五人の弟子、信者数名と共に、中田家を訪れ又重郎を加えた多勢で槍ヶ岳へ向つた。今回は播隆が槍ヶ岳の岩窟で当分の間参籠するので、食料を十分に用意して出発した。三回目の登山は前回より更に容易に岩窟に着いた。播隆は直に口

稱三昧別時を勤め、晴れた日待つては弟子と共に槍の頂上に登り、時々現れる御来光を仏の出現として伏し拝んでいた。八月も末になると高山の朝夕は氷が張るほどの寒さになる。

播隆は他の人達のことを心配して、全員を下山させ、更に寒気を意ともせず、一七日の別時を勤めていた。里でも急に寒くなつたので、又重郎が心配して登つてみると、附近には新雪が降り、きびしい寒さと高山の無理な生活のため、播隆は衰弱し動けなくなつていた。又重郎は彼を救い出し、下山をはじめたが、途中岩につまずき足を痛め歩けなくなつてしまつた。そこで又重郎は播隆を背負つて、十三里の道を辛うじて小倉村へ戻ることができたのである。

この年は天保年間の凶作で、農民は飢饉と悪疫におびやかされていた。播隆が槍ヶ岳を開山して、有名になると、次第に風当りが強くなつた。怪僧が清浄な山へ登つたので、この凶作になつたという噂が広がりました。松本藩では捨て、はおけず、捕吏を小倉村へ遣したが、又重郎は、この西山一帯は公儀より許されて、我が家代々の支配している所である。その中でのことは、お指図は受けぬ」と一言のものに、しりぞけた。



「公私年々雑事記」

第四回登山は天保五年(一八三四)六月十八日であった。弟子数名、松本新橋の大坂屋

山については、先述の「念仏法語取雑録」、大坂屋佐助が印施した「信州嶺嶽略縁起」に詳細に述べられている。それによると、頂上を平にして、祠を造り、今回奉持した銅佛像を、先年安置の三仏に加え、また槍の岩壁白間のうち、七間に木の鍵を結び合わせた善の綱をかけ登山の安全を図つた。

なお、この当時の播隆の動静を伝えるものに野沢村(現三郷村野沢)庄屋務台与一右衛門景沢の「公私年々雑事記」(以下務台家文書と略す)がある。

「(天保五年年)右之節八月廿六日に、尾張美濃の迎を御化益被成候播隆上人と申行者、手前宅へ御出被成候、此上人様は、西山槍ヶ岳に而、当夏五十余日行を被成、八月十二日に御下り被成候、右行之節、槍ヶ岳險難の処、蕪綱御入用に而、去已は凶作に而、蕪悪く去々年の蕪手前方に而差上候に付、御礼として御越被成候」とあり善の綱用の蕪を貰つてゐる。また玄向寺蔵の「三昧発得記」によると、この第四回登山の参籠中に、播隆は先年再興した笠ヶ岳へ後線伝に行つてゐる。

務台家文書によると、播隆は翌天保六年六月廿四日にも、又重郎と共に槍ヶ岳登山をした。尚、同文書によるとその直後に庄屋が播隆の後を追つて登つてゐることがわかる。これは播隆の第五回目の登山にあたり、今回はじめ明かにされたのである。播隆は槍ヶ岳登拝者の安全を図るために、鉄鎖をかけることをかねてから考へていたので、「嶺嶽略縁起」を各地に配布して募金した、多数の信者の喜捨



青島阿弥陀堂の書軸

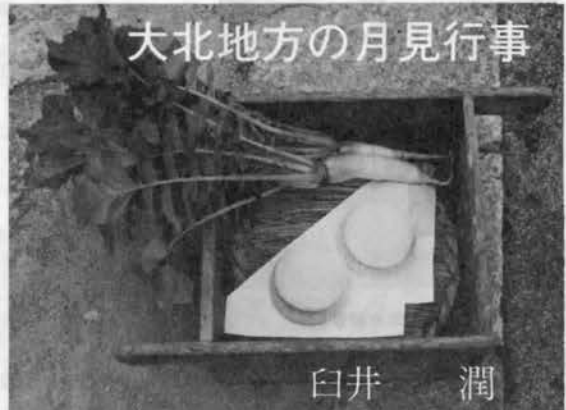
がよせられ、鉄鎖は美濃の関で造られ、三、四ヶ月後には信者達により小倉村へ運ばれた。ところが、こゝで思はぬ障害に遭遇した。

務台家文書には次の如くある。

「天保七年年、播隆上人上長尾あみだ堂ニ、去末ノ十月廿三日ニ御入被御留錫被成候処、当七月廿三日ニ御出立被成、美濃国へ御越被成候、尤去年ヨリ御逗留中、四月上旬より八月迄雨天打続候処、槍ヶ嶽御開き被成候故、大雨降続、凶作ニ相成候由、一統申され候、夫故不首尾ニ而御立被成候、右様之儀、一切無之、諸国共雨天打続、凶作ニ候所、右様之悪評致候段、御気毒之至ニ候」とあるように、播隆が槍ヶ岳を開山し、その名声が高まるに従い、風当りが強くなり、天保の飢饉に結びつけられ「神が怒つて凶作にした」と云いふらす者があり、鉄鎖は松本藩に差し押えられてしまつた。しかし、又重郎ら信者の強力な運動が続けられ、四年後の天保十一年(一八四〇)には、や、豊作にもなつたので、鉄鎖をかけることが許された。しかしその頃、播隆は長年の難行苦業のためか、病を得て自らは槍ヶ岳へ登ることができず、玄向寺で専心念仏を唱えながら、又重郎ら信者達により無事槍に鉄鎖がかけられることを祈つてゐた。

「(天保十一年)播隆上人：去亥年江戸へ御

出府被成律宗二御成り被成 当春御帰りに掛
松本へ御越被成諸方御化被成候 然ル処当七
月ヨリ御大病二而、大村玄向寺二御逗留被成
又重郎らにより無事鉄鎖はかけられ、御病
氣も少々快方に向はれたので、信者達に鉄鎖
懸垂の御礼をかねて暇乞いをして美濃の草庵
へ旅立たれた。務台家文書には「播隆律師去
ル九月十六日二私宅を御立被成中山道通り美
濃へ御帰り被成、太田宿林七左衛門(市左衛
門の間違いである)と申入ノ方二而、御病氣
無御快氣、十月廿一日御遷化被成候 誠二行
ハ厳敷事、一生涯木食二而、塩氣を断毎日朝
六ツ半時一食二而、夫ヨリ後ハ終日一切食事
不被成候、昨年律宗に御成被成候ヨリ已来、
朝ハ粟粥、四ツ半時二食事被成候、去共木食
二而五穀ヲ断、塩氣ハ不被上候、古今稀成大
行也。御法名 號 播隆律師上稱す
又念 蓮社社上人唱阿仏岩播隆大和上」
とあり、務台家文書の別の箇所には、播隆が
初冬の鍋冠山へ冬籠りに出かけ、大荒れの天
候のため、むなしく下山したが、足に凍傷を
負ったことが同われ、その修行のきびしいこ
とを伝えている。播隆は槍ヶ岳開山を大意し
て十八年、第一回槍ヶ岳登山より十五年の長
い歳月を要して、色々の障害を乗り越え、鉄
鎖をかけるという大願成就をなした。それ
は深山に浄土世界を求めた山岳宗教に基く
ものと思われるが、その心の底には近代登山
同様山そのものに、はげしい情熱を燃してい
たものである。北アの三千米を越す名山、二座
を初登頂したことは、今後永く日本山岳史
に光彩を放つものである。最近播隆の新資料
が相ついで発見されている。播隆の未解明部
分が更に明らかになることを願つてやまない。
槍ヶ岳登山の基地、三郷村を中心に、松本
平には播隆の名号碑、書軸などが数多く残さ
れている。当時、天保の飢饉と悪疫の流行に
苦しむ農民は藁をもつかむ思いで生き仏とし
て播隆にすがつたことを物語っている。詳細
は拙著「槍ヶ岳開山播隆」(大修館刊)を参
照されたい。(槍ヶ岳山荘、槍沢ロッジ経営)



月は私たちの住んでいる地球にとって一番
近いところにある天体で肉眼で見てもすぐそ
れとわかることから生活に密着しています。
月には太陽とならんでお日さま、お月さま、な
どとおの字をつけて呼んでいます。おの字を
つけるということは、それだけうやまつてい
る親しみを持っている、おかげをうけている
というようなことからつけるのだと思いま
す。ほかに天体についてはこのような呼び方はし
ていません。
この月と私たちの生活とのかわり方を考え
てみると、大げさないうならば月がなくては
語れません、その例としてまず「暦」です。
月の満ちるのと欠けるのをもとにした生活の
リズムとしての暦、これも月をもとにしていま
す。新月の日を一日に、満月の日を十五日
と決めて日月の目安としてきたのが太陰暦と
いわれる陰暦です。また今の太陽暦を新暦と
いうなら旧暦であり、今でもこの旧暦は各地
に残って生活に生きています。お盆といわれ
るのは旧で七月十五日、新では八月十五日と

なっています。この月の満ち欠けをもとにし
た行事はいくつかあります。どれをとってみ
ても、人々にとつては郷愁をささうものです。
新月の一日をおついたち、三日目、十日夜、
十三夜、十五夜などこまかく各地のものを
見ていくと殆どの日に何かがあります。中
全国的にも大北地方としても行事として定着
しているものに十日夜、十三夜、十五夜があ
ります。
ここでは大北地方で古くから行なわれてい
るこれら月にかかる行事をまとめてお月見と
してとらえてみたいと思います。
中秋の名月は十五夜として親しまれていま
した。この日にはお餅をつきます。たいてい
は大きな鏡餅を二つ作り、それを二斗餅の中
に葉でさんばあてを編んでその上へのせ、葉
のついたままの大根を二本そえて、月の見え
る所へ供えます。このお供え物はなるべく月
に近い方がよいといつて屋根とか木の又のと
ころへ供えたりしました。そしてある日はそ
れより高いところへ大根を投げ上げたりしま
した。こうしたことは人々が少しでも月の近
くへさしあげたいという心根から出たものと
思われます。餅のつき方、粉をつけるつけな
いなどいろいろなやり方がありました。
今は餅をつくところは少なくなり、すすき
にお菓子などという形だけとなってしまつてい
ます。十五夜にちなんだいろいろならわし
があります。大北地方のほとんど全域にある
ものとして「すげばすく」といわれるもの
があります。これは藁をすくつて先の方同士
むすんだもので、昔は稲をたばねたり、菜や
大根をたばねたりするときに使いました。こ
のすげばすくはたばねられるだけ、農作物を盗ん
でもとがめられないといつたしきたりもあり
ました。これは十五夜で満月だから、お月様
が見えて許してくれると考えた庶民の案し
みでもありました。お月様に供えた餅を盗め
ば長者になるとか、大根を一本上げるのは一
本は月にもう一本は太陽にといつた心がこめ

られていたと古老は語っています。
十三夜、十三日目をお月見とふつういつて
いる。餅をついてあげたりすることは殆ど十
五夜と同じですが、農家では十五夜よりもむ
しろ、この十三夜の方がなじみが深いのです。
十五夜は商人の月見だが十三夜は百姓の月見
だとして古来から親しまれてきています。
この日は百姓仕事にとつて一つの節目で初
穂をお月様に見てもらおう。また実りの最後を
守ってもらおうなど信仰的な意味も含まれてい
るお月見です。十五夜に餅をつかなかつた家
でもこの日には何をかお供えもつきました。つ
ごうによつてつけない家でも、白ときねで空
白でまね音だけでもさせるもんだといつてど
の家でも餅をついて月見の行事をしたのです。
十日夜、十日目の夜をこう呼んでいます。
この頃になると農家の仕事も一段落し、稲も
実つて一安心という時期なので、案山子上げ
といつて、田んぼに立てた、案山子やすすき
威しの用具を田んぼから引き上げて、木戸に
たてかけておきこ苦労をねぎらう意味から、
ついた餅を供えたり、案山子の口にあてがつ
たりしました。またそれがすむと、こわして
餅つき用のかまどの火種にしたりするところ
もありました。そして今まで貸りていた作馬
を馬主に返し、貸り賃を精算したりする日と
もなっていました。
お月見はこうしたこと他に信仰的な意
味が大きく月の見え方、その日の天気などと
のかかわりでの年の豊凶を占めたり、ま
た豊作や健康や、安全を祈るといつた願いを
こめた行事でもありました。
(大町市東小学校・市史編纂委員)

山と博物館 第27巻 第10号
発行所 長野県大町市 TEL 〇二二五 発行
印刷所 大町市 山岳博物館
大町市 大町市 印刷部
大町市 大町市 印刷部
定価 年額一、〇〇〇円(送料共二切手不可)
郵便振替口座番号 長野四一三三九三